藤原和好著

『子どもが生きる文学の授業 ―教室の主役たち』

藤原氏はあとがきで、授業をつくることは教師自身が育つことでもあると述べる。授業は、架空の子ども像を想定するのではなく、目の前にいる子どもたちを見つめることから始め、「教師自身も、教育の技術者としてだけでなく、人間として成長」することが大切だとする。

しかし、実際の教室で、また文学の授業の多くで、教師たちは成長することをやめ、子どもたちを見つめ、発見していくことなく、子どもを「見限り」「決めつけ」、見切発車しているという問題点を指摘する。氏が「子ども不在の教育実践」呼ぶゆえんである。

ならば、子どもが存在する文学の授業とは何か、本当の文学の授業とは何かということに、氏は「文学教育とは、文学作品に描かれた人間や世界に触れることによって揺れ動く自己の人間観を見つめたり、お互いのそれを交流しあって人間

認識や世界認識を豊かにしたり深めたりすることだ」と答える。

本書は、その考えに立ち、「子どもから何を引き出すか」「作品の中の人物や思想と葛藤させることによって子どもの真実の姿を見つけ、子どもの可能性を探ろうとする」という観点で貫かれている。

〈第一章　子どもが見える授業の創造〉では、子ども不在の問題を指摘し、なぜそうなのかということを、教師の側、子供の側から分析している。教師の側としては、その一つに、子どもを教えられる存在にしてしまい、作品を理解させ、作品に従属させる指導であるという点で、ことがら主義・課題解決学習・イメージ主義・心情主義といった文学の授業の方法に問題があるとする。そして、子どもが存在する授業、子どもが見える授業を創るために、教材選択・教材分析・授業づくりにおいて、子どもを発見し、その内面、人間観、世界観をひき出すための観点を提言する。

〈第二章　教材分析の観点〉、〈第三章　授業づくりの観点〉では、「かげ」「井戸」「大造じいさんとガン」「茂吉のねこ」「なめとこ山の熊」「ベロ出しチョンマ」「つりばしわたれ」「一つの花」など、多くの具体例をもってその方法を展開している。指導過程では「出会い」「読み深め」「交流」という三段階の流れを提案し、また、教材分析において、人物・世界・思想・表現がいかにして読み手と関わりうるかという観点を提示している。例えば「石うすのうた」においては、自分の役割・値打を見つけたことによって大きく成長した千枝子を、つまり千枝子という人物を子どもに出あわせることで子どもたちに生きる意味というものを考えさせたいとする。

今日、子どもが主役の授業とか、子どもが主体的に学べる授業等のことばをよく耳にする。しかし、ことばの響きに目を奪われ、主役とはなにか、主体的とはどういう事かといったことについては、十分に深く追求し得てはいないのではないか。本書において氏はこれまで曖昧だった主体的・主役ということばを、文学教育において、教師は子どもの内側にある人間観・世界観といったものを表に引き出させ、子ども自身に自己を見つめさせ、その自己を乗り越えさせる、と定義し明らかにしたといえるだろう。そしてその視点からの数々の教材分析や指導法は、藤原氏を中心にした三重国語の会刊行『語り合う文学の授業』に続き、文学教育を追求するものに多くの示唆を与えてくれる。

（A5判　二〇四ページ　一九九一年六月二十日　部落問題研究所　一、七〇〇円）

（四十塚　都）